

佐々木邦全集

補卷三



佐々木邦全集 補卷3

主権妻権 新家庭双六
アバートの哲学者 花嫁三国一

昭和五十年十月二十日 第一刷

昭和五十年十一月二十八日 第二刷

著者 佐々木邦

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一―二一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©佐々木孝雄 一九七五年

目次

主権妻権 5

新家庭双六 123

く
アパートの哲学者 245

花嫁三国一 341

解説・尾崎秀樹 448

主
權
妻
權

程 度 の 問 題

晩^{ばん}歸^きりの私を玄関に迎えてくれた叔母は、

「又新井さんのところ——でししょう？」

と図星を指した積りだった。

「いゝえ」

と一言、私は手短かに答えたが、会社の帰りを余所へ廻った時は、一寸言訳をするのが常例なので、

「違いますよ。原君に引張られて今まで酔っ払いの介抱です。厭になっちゃいます。」

と付け加えた。

「久男さんは現金ね」

と叔母は私の仏頂面を見てニヤ／＼笑った。

「何故？」

「新井さんのところだとニコ／＼して帰って来るじゃありませんか？」

「そんなこともないでしょう」

と打消したものゝ、私は叔母の觀察眼に内心辟易した。

「いゝえ、一昨日と今日はまるっきり違っていますわ」

「でも今夜は原君にサン／＼管を巻かれたんですもの」

「それもありましようが、久男さんは少し綺麗好き過ぎて

よ」

「それは潔癖は多少はありましよう」

「いゝえ、同じお友達でも奥さんの綺麗なところだと、ホ、ホ、」

と叔母は何でも思つたことを言う。叔母といつても叔父の配偶で、私と二つ三つしか違わないから遠慮がない。それに私は京都の大学を出て此方へ就職して以来ずっとお世話になっているから、お互に気心が分つている。叔母よりは姉に近い。もっと精確にいうと、姉さんに親友の要素を加味した叔母さんである。

「そんな大きな人に叔母さんなんて呼ばれたくないわ」と先方も私を弟視して、

「これでも世間の叔母さんのように未だ然う頭が古くない積りよ。充分共鳴出来るんですから縁談のことは私に委せておきなさいね。決して悪いようにはしませんわ」と悉皆呑み込んでゐる。

實際の話、私も叔父よりは叔母に余計共鳴する。叔母を叔母と思わないではないが、叔父に対すると何うしても叔父という感じに圧迫される。間に敷居がある。日進月歩の今日では年が十以上違ふと、物の見方が必ずしも一致しない。職業が学校の先生で、専門が哲学と来ているのは、素より当人の都合だから苦情もないが、

「久男さん、俺はこの間内務省の人と話をしていた一大発見をしたよ。活動写真で飯を食っている人間が大勢あるんだってね。流行っていることは知っていたが、今更驚いた」

なぞと平気で言うには此方が今更驚いてしまふ。

「昨今は日本ものも随分進歩しましたから、映画俳優の数は大したものでしょう。しかしアメリカあたりに較べると未だ／＼規模が小さいです。彼方のものには一つの映画に何千という有象無象が駆り出されますからね」

と私が調子を合せると、

「俺はアメリカのは知らないが、岡山孤児院のを見たことがある。孤児が大勢出て来たよ。確か明治四十年か四十一年のことだったと記憶する」

とある。これは少々極端な実例だが、世間一般のことは先ず大体斯うした調子だから、一々お相手をするにはナカナカ努力を要する。幸い始終書齋へ引っ込んでいるから、私も助かるというものだ。

夫婦仲は極く睦いようだが、未だ子供がない。学問以外は何も分らない人だから、叔父が子供を兼ねている。打棄^{うちす}って勉強^{べんきやう}さえさせて置けば機嫌が好いのだから、世話は焼けないけれど張合^{ちやがひ}がないらしい。私は哲学者には娘をくれるものではないと思っている。叔母は退屈するから、自然私を気散じの話相手にして、叔父へは家事上の抛^なろない相談丈^{さだ}け持ち込む。

「あなた、この頃二階のお座敷へ雨が洩りますよ。何ともないと思っていました、矢張り何処か瓦がずったのでしょうね？」

と叔母は食事の折に言い出す。地震でビクともしなかったという堅牢^{けんろう}一式の日本造りも、周囲が建て込んでいるから二階の屋根は見えないのである。

「道理でこの間の晩天井から水が落ちて来た。大変小便をする鼠だと思っていたが、雨かい？ これは驚いた」

と叔父は哲学者にも拘らず能く驚く。

「まあ、書齋も洩りますの？」

と叔母は呼ばなければ書齋へは入らないことになっている。

「雨なら確かに洩るんだね」

「早速直さなければなりませんわ」

「直すさ」

「でも大分かゝりましょうよ」

「それは仕方がないさ。雨が洩るようでは屋根本来の目的に副^そわない。明日にも専門家を招聘^{しやうへん}して鑑定させるさ」

と叔父は屋根師を呼ぶにもこの通り用語がむずかしい。私は斯ういう堅い叔父の家に預けられている。曲りなりにも大学を卒業したものを預けるの何のというのは聊^{いささ}か穩当^{えんたう}を欠いた話だけれど、私は預けられ癖がついているから、然う侮辱とも考えていない。中学校へ丈^{だけ}は両親の膝下^{かた}から通ったが、高等学校では先生の家へ預けられた。大学へ入ったら下宿が出来るだろうと思っていたら、親父は、

「京都は誘惑の多いところだから、お前のような薄志弱行のものは野放しに出来ない。学生時代に遊ばれちゃ大変だ」と言^いって、私を友人の家へ預けた。卒業して東京へ勤め口^{くち}が定^{きま}った時、私は今度こそ解放される積りで、一と先ず叔父の家へ行李を下したが、矢張り預けられる運命を持っていた。

「久男さん、君は京都で放蕩^{ほうたう}をしやしなかったかね？」

と叔父は突然訊いた。哲学者は他の思惑なんか些^ちとも考えない。

「いゝえ、一向」

と私は叔母の手前赤くなつてしまった。

「可怪しいな」

「あなた、何ですんねえ、そんな失礼なことをお訊きになつて」

と叔母は窘めた。

「不思議だなあ。久男さん、実はお父さんから前々相談があつて、君をお預りすることになっていきます。万一異存があるようなら、何うにでもして説きつけてくれるという依頼ですよ」

と叔父は親父の差金まで口に出した。

「はゝあ、然うでしたか。道理で下宿のことは叔父さんと叔母さんに相談して好いところを探して貰えと申しましたよ」

と答えて、私は何うも親父には善意のベテンを食わせられると考え込んだ。

「異存があるかね？ あれば説きつけなければならぬ」と叔父は冗談だか本気だか分らない。

「異存は勿論ありませんが、御迷惑じゃございますまいか？」

「いゝえ、一向構いませんのよ。女中はいますし、子供はありますんし。実はお部屋も最早定めてありますのよ」

と叔母は心底から言ってくれた。斯う皆共謀になつていては逆も敵わないから、

「それではお言葉に甘えて、恐れ入りますが、宜しく御面倒をお願いします」

と私はもう諦めた。

「それで俺も安心した。自分の家にいる積りで遠慮なくね」

と叔父は至極満足のようだった。

素より謹直な私は叔父の家が一向窮屈でなかった。半年ばかりたった時叔父は、

「久男さんは案外堅いんだね。未だ一晚も外泊したことがないには驚いた」

と感心した。学校時代に方々へ預けられたものだから余程悪い奴と思つていたのに相違ない。

「お父さんやお母さんが子煩悩で、未だ子供のように考えていらつしやるからよ」

と叔母が私のために弁じてくれた。實際親父の念入りに迷惑する。殊にその当座は叔父のところへ宜しく監督を頼むなどと頻繁に言つて寄越したので、私は痛くもない腹を探られたのである。爾来四年になる。叔父叔母の信用は会社とのそれと共に決して浅い方でない。今や齡既に三十に達し早晚配偶を求めて新世帯を持たなければならぬ機運に際合しているから、私は叔父叔母の親切で殺風景な下宿住いの味を全く知らずに済みそうだ。現在の境遇に少しも不満足がない。そうして将来の生活に多大の希望を囑している。今が一番花かも知れない。

さて、その現在へ物語を引き戻す。飲助の原君に悩まされた翌日は日曜だった。朝飯の卓上叔母は、

「あなた、私は昨夜久男さんから面白いお説を承りましたよ」

と話し始めた。叔父は二階の書斎を城廓として食事の時の外に滅多に下りて来ないから、叔母は機会を善用しなければならぬ。

「は、あ、久男さんの学説は珍らしいね。人生観かな？」
と叔父も根からの話嫌いではない。

「婦人観ですわ。ねえ、久男さん？」

「叔父さんにあんな出鱈目を仰有っちゃ困りますよ」
と私は少々狼狽した。

「婦人観か。その中に結婚するんだから婦人観は大いにありそうだね」

「婦人と美人とは違うそうですから、美人観ですわ。美人国宝論とでも申しましょうか？　ねえ、久男さん」

と叔母は一々私に念を押す。

「それは面白そうだ。内容は？」

と叔父は私を顧みた。

「冗談ですよ」

と私は全く冗談に言ったことだった。

「一口に申し上げますと、美人は自然芸術の傑作ですから、天下共有のものだそうです。桜の花のようなもので、折ってはいけませんけれど、見て楽しむ分には一向構わないんですって。それだから御最良の活動女優は素よりのこと何処の奥さんでも嬢さんでも容赦はしないと仰有いますの」
と叔母は調子に乗って能弁に紹介した。

「ハッハ、ハ、豪い意気込みだ」

「皆権利があるんですって。鼻息が荒いんですよ。共産主義ですわ」

「若い中は何人も然うさ。久男さん、冗談は指いてソロソロ国宝を手に入れては何うですか？　お父さんから度々言ってくる」

と叔父も考えていたと見えて一寸促した。

「その中に何うかする積りですが、未だ一向心当りがありません」
と私は真面目に答えた。

「国宝を狙っていないさるからナカ／＼手間がかかりますわ」

と叔母は序をもつて訴えた。

「貰えば国宝になるさ。俺もこの歌子が国宝だ」

「そんな理想の低いことを仰有ると笑われますよ」

「何故ね？」

「私ぐらいのは何うでしょうと参考の為に伺いましたら、そんなのは唯の婦人だから叔父さんの私有ですとさ」
「厳しくやられたね。矢張り国宝の積りで白粉なんか塗らない方が宜いかな」

と叔父は本氣にしたようだった。

「今の丈は叔母さんの作りごとですよ」

と私は念の為に正誤して置いた。

「久男さんは今日は国宝拝観にお出かけね」

と間もなく叔母が言ったが、これは真正だった。私は今日新井君のところへ約束があつて、それを昨夜話したので所謂国宝論の緒口になったのである。

こゝで私は自分というものを少し吟味して見なければならぬ。叔母は昨夜私のことを綺麗好きと評した。新井君のところから帰って来る時は相好が崩れていると言った。恐れ入ったる御眼識である。国宝論は座興だったが、冷静に考えると、思い半ばに過ぎるものがある。或は私は普通の男子よりも二三割女にのろいものではあるまいか？　道を歩いていても男よりは女が余計目につく。電車に乗っても

綺麗な人の方へ注意を惹かれる。これは叔母には内密だが、つい先頃のこと、私は停留場から家へ帰る途中大層品の好い若奥さんと摺れ違つた。立派な保護建造物だと思つて振り返つた拍子に電柱と衝突したのは、一寸の積りが後ろ向きになって、そのまゝ歩を運んでいたものと察せられる。不見識はこれに止まらない。折から道傍で仕事をしていた土工達が、

「おい、しっかりしろ！」

と私を冷かした。私は余程面食つたと見えて、家へ入ると、

「何うかなすつたの？」

と叔母に怪しまれた。

「いゝえ」

「一足違いでしたわね。今日は綺麗な奥さんが見えにやつたんですよ」

「然うですか。それは惜しかったですな」

と私は澄ましていた。この辺は少々偽善者の傾きがある。叔母に内兜を見せると、それを種に油を取られるから自然嘘をつくようになる。ずっと以前の話、

「叔母さん、今日は婦人に礼を施して蝙蝠傘を一本失くして来ましたよ」

と率直に告白したことがある。私は電車の中で国宝に席を譲つたのは宜かつたが、蝙蝠傘を置いて来てしまったのである。

「綺麗な方？」

と叔母は器量に相応自信があるから直ぐに容貌を問題にする。

「迎も美人でした。あれなら蝙蝠傘の古いの一本ぐらい惜しくありませんよ」

と私は誇張した。

「好い気なものね。蝙蝠傘を失くして嬉しがっていれば世話はないわ」

「嬉しがりもしませんけれど、あれはもう古いんですから、献上しても遺憾ありません」

「遺憾なければ御満足でしょう？ 同じことじゃありませんか？」

とあつて、大笑いになったが、叔母はナカ／＼忘れない。

「久男さん、これぐらいなら新調の蝙蝠傘でしょうね？」
なぞと昨今でも雑誌の口絵を見ながら蝙蝠傘を標準に持ち出す。

斯う美人に心を惹かれるのも、実は特に女にのろいのでなくて、目下細君物色中だからとも考えられる。あの奥さんの着ているような柄が欲しいと叔母が言うのは、私の場合に当てはめると、あんな細君が欲しいとなり得る。しかしいくら気に入っても他の着ているものは無心出来ない。

そこで叔母は三越へ駆けつけて似寄りの柄を探す。私のもそれだ。唯困ることに何んな百貨店へ行つても花嫁の新柄陳列はない。まさか結婚媒介所へも申込みないから、自然途上や行先で見かける婦人が目に留まる。一概に生来のろいのではない。事情廻らなく目下二三割のろくなつているのである。純真にのろいという問題なら同僚は皆のろい。配偶選定中の私が広く女性を礼讃するに對して、彼等妻帯者は狭く女房丈けを渴仰している。私は黙っている

が、仲間の純真なるろさに就いて動かし難い実証を沢山握っている。それを一二挙げて見よう。

三年前に同課のものが五名誘ひ合つて小金井へ花見に行つたことがある。その折道傍の葦簾茶屋へ寄り込んで簡単な昼食を認め、尚お足を休めている間に、

「何うだい？　こゝの扱いはこの中で一番の艶福家に負担させようじゃないか？」

と一人が發起した。

「然うさな。しかし斯う見渡したところ艶福家らしいものもないようだぜ」

ともう一人が応じた。この男は好くない癖だ。自分の経験丈で他の身の上を類推する。

「頭が鈍いね。一番女房に持てる奴ということだよ」と言つて發起人は笑つた。艶福即ち女房に持てることゝ

解釈しているのも片腹痛かつたが、

「それは然うと足りるか知ら？」

と矢庭に三名のものが申し合せたように懐る勘定を始めたには呆れ返つた。その意味なら皆艶福家だったのである。苟くも持てると思つてゐる以上は女房を美人と思つてゐるに相違ない。妖怪変化に持てるからといって他の支払を負担する気にはなれない筈だ。

「可哀そうに服部君は黙っているね。君は宜いよ。独身者だから資格がない。僕達に委せて置き給え」

と發起人が私に同情して、結局四人で払ってくれた。奴さん、頗る自信家だから、実は悉皆自腹を切る積りで發起したのかも知れない。

同課に机を並べてゐるものは四人や五人でない。二十何

名がある。無論私のような無責任者が四五名いるが、余他は皆何処から探して来たか夫れ／＼細君を持っている。私は独身者の気軽さ、大抵のところへ推参して、奥さま連中に面識の榮を得ている。何れも皆無産有識階級の内助として申分ない人達だ。能く働き能く子を生む。この奥さま方が婦人会というのを主催になる。目的は家族同志の懇親を計るのだそうだが、事實は服装の競争や良人達の棚下しに平日浩然の氣を養うのだという評判もある。春秋二回奥さまがお二人宛当番幹事を廻り持つて何方かの家を会場とする。その亭主野郎が二名、公務の余暇を偷んで、奥方の文案になる案内状を謄写版で印刷し、封筒に宛名を書いて、室内を配達して歩く。

「何うぞ御出席下さる様に家内に代つてお願い致します」

と鞠躬如として女房共の文使いを勤める態を見てると一寸気の毒になるが、当人達はこれを細君奉仕デーと称して少しも差支むことを知らない。

「服部君、君にも早くこの御案内状を差上げるようになりたいね」

とニタ／＼している。

「ふん」

と鼻先で扱つても、

「ヘッヘ、ヘッヘ」

と笑つてゐる。斯ういう時には頭の一つぐらい叩いても文句を言うまいと思ふけれど、それは未だ試して見ない。

更に個人を引き合ひに出せば例の原君がある。この飲助

は細君奉仕をたつぷり一人前勤める上に、女といえはカッフェの女給でも乗合自動車の車掌でも一視同仁で、何とか敬意を表さないと気が済まない。一緒に飲みに行っても、「おい、姐さん、姐さん」

と呼び通しだから、本人の嫌われるのは自業自得だが、此方まで迷惑する。器量の如何に論なく、唯側へ引きつけて置きたいのだ。電車が一時女車掌を採用したことがあったが、その頃私は偶然この先生と乗り合せて好い恥をかいた。

「君、切符は未だ切るまいね」

と原君は周囲へ聞えるような声で訊いた。尤も電車の中の質問としては当然のことだから、

「未だだよ」

と答えると、

「僕は大失策さ。うっかりしていて男車掌に切らしてしまった。君の切符を貸し給え」

と言うが早く、

「おい、姐さん、姐さん」

とやり出した。車掌でも姐さんだから敵わない。

同僚には特に謹厳な人もないではないが、原君のようなものもあるのだから、私は公明正大に批判して謹直ぐらいのところへ行く。矢張り下地からのろいのでなく、事情抛らないのである。この故に新任の新井君と別懇になって、その新家庭を度々訪れるのも夫人が自然芸術の傑作だからでない。夫人も無論歓迎してくれるが、主人公と共鳴するところが多いからである。

「服部さん、私の家へ遊びに来てくれませんか？」

と新井君が誘ったのは就職後未だ間もないことだった。私は机が隣り合いで帰るも途中まで一緒だったから、他の同僚よりは意思の疎通が早かったのである。初対面の折は妙にハイカラな男だと思ったが、話して見ると極く率直で、自然此方も打ち解けざるを得なかった。昼食の時は一緒に坐って、断片的に消息を伝え合うのが常だった。

「三十ですか？ 私と同じですね」

「彼方には長くいましたか？」

「九年いました」

「九年もいたら随分勉強が出来ましたろう？」

「いゝえ、駄目です。半分は労働でしたからね」

「しかしコロンビヤをお出になったんでしょう？」

「然うです。あなたは東京の帝大ですか？」

「いや、京都です」

「日本で働くには矢張り日本で勉強した人の方が宜いですがな」

「そんなこともないでしょう」

「いゝえ私は仕事がさっぱり分らないんです」

「今に慣れますよ」

といった調子で、お互に身の上を知り合った。

「服部さん、あなたは未だ独身でしょうね？」

「然うです」

「直ぐ分りましたよ」

「何故？」

「でもネクタイが毎日曲っています」

「成程、豪いところへ目を付けましたな。あなたは？」

「この間貰ったばかりです」

と新井君は如何にも会心らしい微笑を洩らした。ネクタイはと見たら真直ぐだった。新夫人に結んで貰ったに相違ない。私は急ぎ立てられるような心持がした。物色中の独身者に新世帯は耳よりだった。今思い合せると、新井君は新婦のことを話したくて仕方がなかったのである。それから結婚や家庭が始終話題に上った。

「服部さん、あなたも近々でしよう？」

「何ですか？」

「結婚ですよ」

「さあ。未だ相手が見つかりません」

「日本ではナカ／＼見つかりませんね。私も骨を折りました」

「仲間じゃなかったんですか？」

「彼方式にやりました。見つけるのに骨を折った上に、貰うにお百度を踏みましたよ」

と臆面もなく言うから、新婚早々にしてもナカ／＼傾倒していると思った。

「服部さん、こゝの方は大抵奥さんがあるんでしょね？」

「ありますとも。ネクタイは曲ついても大抵円満な家庭を持っています」

「ネクタイは余り標準になりませんな。神鞭さんのように全然忘れて来る人がありますからね」

「あの人はネクタイどころか、カラーを忘れて来たことがありますよ。子供が多いから奥さんに構って貰えないんでしょう」

「然うでしような。彼方にもあんなボヒーマアンがいます

よ。しかし面白い人ですね。この間私に、君は独身だろうと訊きましたから、貰ったばかりだと答えますと、いきなり背中を叩きました。力がありますな、あの人は。家へ帰って背中が痛いと言ったら、妻は大笑いをしましたよ」

と新井君はいつも細君に帰着した。

日一日と親しみが増して、私が僕になり、あなたが君になった頃、

「君、僕のところへ遊びに来給え。妻を紹介する」

という招待が頻繁を加えたので、私は或日会社の帰りを新井君の引き廻しに委せた。もうそれまでには細君のことを可なり手放しに聞かされて千鶴子さんというお名前まで承知していた。お百度を踏んだと公言するくらいだから、相応の美人には相違なかるうと思っていたが、すべて綺麗さはのろさに正比例する。私自らは昨今特別で二三十パーセント割増がついているけれど、新井君は何十パーセントか程度が分らなかった。ことによると桁が違っているかも知れないと考えたし、尚お才子必ずしも佳人を振り当てるものでない。同僚の家庭を見渡しても、何という皮肉か、気の利かない醜男が勿体ないような細君を自在に扱き使つて、目から鼻へ抜けるようなのが案外にも太った女の下敷に甘んじている。それで私は余り期待もしていなかったから、

「千鶴子さん、服部さんを連れて参りましたよ」

と新井君が玄関先で呼んだ時、これはイヨ／＼桁外れだと思い込んだ。女房を様づけにするものは少くとも同僚間がない。

「千鶴子さん！」

と新井君が又呼んだ刹那に玄關の電燈がパッとついて、
「はあ」

と答える声諸共障子がスッと開いた。私は、

「はっ！」

と最敬礼をした。此方に割増がついている上に先方が正直正銘の国宝だったから一も二もない。

「ようこそお出下さいました。さあ、何うぞ」

と千鶴子夫人は淑かに手を支えた。私は再び最敬礼をして客間へ通った。

「実は妻は昨日も待っていたんです。今日来てくれないと僕は叱られるところだった。千鶴子さん、服部さんです」

と新井君は改めて紹介してくれた。

「主人が始終お世話になりました……」

と言ひ半して、千鶴子夫人は桜色に上氣した面を伏せる。

「何う致しまして。手前こそ」

と私は頭を疊へ摺りつけて、洋行婦りにも似ず日本間だと思つた。

真正に待っていたと見えて、念を入れた夕食の支度がしてあつた。

「女中も少しは手伝つたらうが、これは皆千鶴子さんが拵えたのです」

と新井君は早速吹聴に及んだ。

「真正に何にもございせんが……」

と千鶴子夫人も薦めた。

「何うも御馳走になりに上つたようで困りますな」

と私は恐縮だった。実を言うとは私は潔癖だ。余所の家の

ものは何うも薄汚いような心持がするから、飯時には急いで逃げ出す。しかもう一方例の綺麗好きで、奥さんが綺麗なところだと氣味の悪いような感じは一向しない。綺麗な人に汚いことはないという信仰がある。この辺に思い至ると、のろいのが地金かも知れない。新井君の家の夕食は国宝のお手料理だから保険つきだ。恐縮はしたものの、御辞退は出来ない。他では絶対に箸をつけない香の物まで快く戴けた。

「主人は服部さんをお頼りにして始終お噂を申上げているのでございますよ。彼方から帰つたばかりでお友達がありませんから、兎角淋しいのでございましょう」

と千鶴子夫人はお給仕を勤めながら仰有つた。

「長く外国へ行っていると然うなりますな。しかし御親戚は沢山おありでしょう？」

と私は夫人に訊いたのだが、

「皆郷里にいて田舎ものばかりだから話相手にならない」

と新井君が口を出した。

「でも奥さまの御親戚がございましょう？」

「これは里が東京だからね、随分あるよ。近所にもある。しかし君、アメリカの友人が、自分の妻の関係者の中では矢張りその良人が一番好いと言つていたけれど、これは真理だね」

「妻の良人といえば自分じゃないか？」

「然うさ。此方でも然うだが、彼方では妻の母を組織的に排斥する。そこを穿つたものだらう。僕は里の母が来ると痛切に然う感じるよ」

「主人はいつもあんなことを申して私に譴いますのよ。」

私、今度お母さんに言いつけて上げるから宜うございますわ」

と千鶴子夫人は腕む真似をした。何という魅力のある目だろうと私は思った。いや、申後れたが千鶴子さんの声は透き通るような涼しい声だ。美人は顔容ばかりの問題でない。

「しかし未だその先があるんでしょう？ 妻と自分なら妻の方が好いと仰有りはしませんか？」

と私は冷かしてやった。

「オホ、、、」

「ハッハ、、、」

と夫婦は笑っただけで答えなかったから、これは図星だったかも知れない。

才子佳人の営む円満な新家庭は居心が好かった。私は初めての訪問にも拘らず、つい話し込んで晩くまでお邪魔をした。千鶴子夫人は私のためにヴァイオリンを弾いてくれた。御手練のほどは素人の私には分らなかったが、見物するだけで充分だった。矢張りこんな柄を貰いたいと思つて、幾度もアンコールを所望した。音楽を見たがる人間は減多にあるまい。

「服部君、今度は僕が一つ歌おう」

と新井君が調子に乗った。しかしこれは見物の価値がないに定っているから、

「君、もう失敬する。先刻十一時を打ったよ」

と言つて、私は間もなく辞し去った。これが切っかけで、私は新井君の家へ時々招かれる。新井君も私のところへやってくる。悉皆親密になつてしまつた。

芝 居

「久男さん、参りましょうか？」

と叔母は夕刊を翻しながら相談をかけた。

「さあ」

と私は二階へ上つて行く叔父の後姿を見送つた。夕食の折に叔母が芝居見物を発起したのだった。然ういう場合、叔父は応じることもあるが、大抵は、

「久男さん、君、行つてやつてくれ給え。俺は忙しい」

と言つて、私に叔母のお供を頼むのが常である。今日もそれで、少時決し兼ねた後、

「久男さん、連れて行つてやつてくれ給え。今度は長かったから、もうソロ／＼油の切れる時分だ」

と笑つて逃げてしまつた。

哲学者の家庭はソクラテス以来妻権即ち主権で、女房が全権を握っている。叔父は決して、叔母に逆らわない。書齋以外の問題は万事叔母に委せてある。これは度量が広いのでなくて、何にも分らないのである。雨洩りがしても、この頃は天井の鼠が無暗に小便をすると思つてゐるのだから暢気なものだ。随つて結婚後今日までに自分の財産が何れぐらい減つたか御存じない。毎月俸給袋を学校から叔母の手許まで運ぶのが唯一の財政的交渉で、他は一切叔母の切り盛りによる。豪く信頼したものだと思つたけれど、然うでもない。

「あれは虚栄心が強くて困る」

と零すこともある。叔母は實際派手好きだ。しかし逆ら